学校事例 1

# 「まずやってみる」で効果を実感 独自の言語活動で指導が進化

## 佐賀県 吉野ヶ里町立三田川中学校

新学習指導要領を2年前倒しして、言語活動の充実に取り組み始めた吉野ヶ里町立三田川中学校。「実践」を重視し、生徒の課題に即した「三田川中学校がとらえる言語活動」を構築した。教科横断での研修にも取り組み、学校全体の教育力の底上げを図っている。

### 生徒の現状

- 知識の定着と活用する力の両面に課題
- 落ち着いているが、人前で表現することや自主的に物事に取り組むことが苦手

### 取り組みの基本的な考え方

- 従来の教え込み中心の授業を改善することで、知識の定着と、思考力、判断力、表現力の育成の両方を目指す
- 改善の柱に言語活動を据え、校内研究を進める

### 取り組みの概要

- 講師を招へいし、言語活動の基礎知識を押さえる
- 授業での実践を通じて感じた課題や疑問、成果を文献で確認し、実践することを繰り返す
- 言語活動の具体例を全教科で共有し、それを基に各教科の指導計画を作成する

### 取り組みを続けるポイント

- 生活指導や集団づくりの要素を取り入れる
- 教師全員が納得しながら取り組めるように、まず実践してみて効果を実感し、従来の指導に自信を持ってもらう
- 授業以外の場面でも「言葉」を使う活動を組み込む（毎朝行う「今日のことば」）

### School Data

◎1947（昭和22）年開校。2009年度から3年間、文科省の指定を受け三田川小学校と英語教育の小中連携を推進。吉野ヶ里遺跡を擁する歴史の町から世界へ羽ばたく人材の育成を目指す。

校長◎下川孝廣先生

生徒数◎ 256 人　学級数◎ 9学級（うち特別支援学級1）

所在地◎〒842-0031　佐賀県神埼郡吉野ヶ里町吉田 303

TEL◎ 0952-52-2195

URL◎ http://www3.saga-ed.jp/school/edq11651/

公開研究会◎ 2011年11月18日（金）

### 公開研究会を2011年11月18日（金）に実施します

研究テーマ◎「やさしさ三田川の心で、コミュニケーションを大切に学び合う児童・生徒の育成」（小中連携・英語／言語活動の充実）

内容◎全体会、各教科の研究授業と部会、小中合同分科会、講演

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第2回

# 言語活動で授業を捉えなおす

## 活用型の力の不足が課題 言語活動に活路を見いだす

吉野ヶ里町立三田川中学校は、２０１０年度に全教科で言語活動を導入した。そのねらいは学力向上にある。「全国学力・学習状況調査」の結果では、知識を問うA問題はほぼ全国レベルにあるものの、活用する力を問うB問題に課題があり、県の学力調査においても多くの教科が県平均を下回っていた。従来の教え込み中心の授業だけでは教科学力の向上には限界があると、教師は感じていた。下川孝廣校長は次のように話す。

「知識を詰め込むだけでは学力は定着せず、思考力や判断力、表現力も育ちません。言語活動の充実は新課程でもうたわれており、学校にとって検討が必須の課題です。校内研究のテーマにして教師全員で取り組むことによって、教師一人ひとりの授業力を高め、生徒の学力向上につなげていきたいと考えました」

教科学力の向上に加えて、生徒の主体性を伸ばす手立てとしても、下川校長は言語活動に期待を寄せる。

「本校の生徒は人前で自分を表現することが苦手で、自ら進んで取り組もうという姿勢が十分ではありません。授業中に活躍の機会を設け、主体的な学習態度や表現する力を身に付けてほしいという思いもありました」

## 「まずは実践してみよう」 実践主義で言語活動を体得

同校は、言語活動を教科目標達成の手立ての一つとして明確に位置付けている。佐賀大文化教育学部附属中学校で言語活動を研究した古賀勝利教頭はこう強調する。

「各教科の授業で行う言語活動は、各単元の目標や流れに合わせて組み込んでいます。単に話し合いや発表の場を設けるだけでは意味がありません」

同校では言語活動を4領域に分類。授業の目的や意図に応じて領域を組み合わせる。

**①思考操作…マッピングや比較・構成・分類などを行う**

**②言語操作…記録する、調べる、読み取る**

**③言語運用…発表や表現、説明、振り返り**

**④交流…話し合いや問答、相互モニタリング**

今でこそ言語活動は授業に定着しているが、その道のりは平たんではなかった（**図1**）。当時は先行事例がほとんどなく、解説書も少なかったため、同校は教師自身が実践しながら言語活動とは何かを体得していく方法を取ることにした。古賀教頭や外部講師による**研修**を行い、活動の意義や目的を明確にした上で、**教師全員が授業に言語活動を取り入れた**。研究主任の日吉政治先生は次のように振り返る。

「まずは実践してみようというのが本校の

吉野ヶ里町立三田川中学校校長
**下川孝廣** Shimokawa Takahiro
『豊かに自律、たくましく自立』。自主性と判断力を身に付けた生徒を育てたい」

吉野ヶ里町立三田川中学校教頭
**古賀勝利** Koga Katsutoshi
「他者を認め、周りの人と調和しながら、のびのびと自己表現できる子どもを育てたい」

吉野ヶ里町立三田川中学校
**日吉政治** Hiyoshi Masaharu
研究主任。理科担当。「人から言われたまま動くのではなく、自分で考えて行動できる生徒を育てていきたい」

**図1　言語活動の取り組みの流れ**

1. 言語活動の具体的な取り組みについての研修
2. 言語活動を意識した授業実践
3. 各教科での言語活動例の文献調査
4. 各教科の言語活動実践の記録（第１回）と検討（単元の指導目標との関連付け）
5. 各教科の言語活動実践の記録から言語活動の抜粋（教科の枠を超えて一覧化）
6. 同校がとらえる言語活動の作成
7. 同校の言語活動のとらえ方作成 ▶ 図2
8. 国や県の学力調査と県立高校入試の分析
9. 各教科の指導方針の作成 ▶ 図3
10. 各教科の言語活動実践記録（第２回）と検討 ▶ 図4

＊同校の資料を基に編集部で再構成

方針です。『教科目標を達成する』という目的だけはぶれないように気を付けながら、自分たちが思う言語活動を実践しました」

実践後は**文献調査**（＊）をし、活動は適切であったか、活動相互のつながりはどうすべきかなどを理論面から確認。そこで得た**知見を授業に反映し、指導の改善**を図るというサイクルを繰り返した。目の前の生徒の課題に即した実践から生み出される言語活動だからこそ、学校の力となり、教師が継続できる指導が可能となった。

## 全教科の言語活動を一覧に集約 年間指導計画づくりの基準に

これらの成果を踏まえ、**各教科で行った言語活動を洗い出し**、その活動は本当に言語活動なのか、単元の指導目標を達成するために効果的かなどを勘案。先述の4領域（P・9）ごとに**教科の枠を超えて分類**し「三田川中学校がとらえる言語活動」にまとめた（**図2**）。

これらの活動をより現実の課題に即したものとするために、「全国学力・学習状況調査」と県の学習状況調査において**正答率の低い問題を抽出して課題を明らかにし、解決を図るための言語活動の方法を探った**。そして、各教科で領域・学年ごとに行う言語活動を明確にし、**3年間を見通した系統的な指導を行う基本方針**をつくり上げた（**図3**）。

こうした作業を経て、研究開始から1年後

図2　三田川中学校がとらえる言語活動

| 思考操作 | 言語操作 | 言語運用・交流 |
|---|---|---|
| **○○をするためにマッピングする**<br>● 自分が知っている情報を集めるためにマッピングする<br>**○○するための観点をみつける**<br>● 情報を整理するための観点をみつける<br>**○○を構成する**<br>● 説明する文章の順序を構成する<br>**○○を比較する**<br>● 有理数と無理数の無限小数を比較することで違いを見いだす<br>● 日本とアメリカの農業を比較する<br>● 豆電球の前後の電流の大きさを比較して違いを見いだす<br>● 仮説の真偽を検討するために、仮説と結果を比較する<br>● 友達の作品と自分の作品を比較する<br>● 表やグラフを用いて栄養の特徴を比較する<br>● 各グループの献立を比較する<br>**○○と○○を関連付ける**<br>● 仮説の真偽を検討するために、現象と原因を関連付ける<br>**○○に気付く**<br>● 立場によってものの使いやすさが異なることに気付く<br>**○○を分類する**<br>● 観点別に情報を分類する<br>**○○を予想する**<br>● 降水量のグラフをもとに、農業の分布を予想する<br>**○○を追及する**<br>● 電卓を利用し、逐次近似値的に追及する | **○○をつかって記録する**<br>● 実験結果を表やグラフで記録する<br>**○○しながら聞く**<br>● 情景を想像しながら聞く<br>**○○を読み取る**<br>● 情報の中心となるものを考えながら読む<br>● 地図から日本の位置を読み取る<br>● 面積のバランスに関する約束事を読み取る<br>● 石油の分布を読み取る<br>● アメリカの割合をグラフから読み取る<br>**○○を箇条書きに書く**<br>● 絵を見て、色の対比について気付いたことを箇条書きに書く<br>● アメリカの学生に尋ねたいことのキーワードを列挙する<br>**○○を調べる**<br>● 曲の構造的要素を調べる<br>● 食品に含まれる栄養素について、食品成分表をもとに調べる<br>**○○を評価し合う**<br>● 捕球姿勢や投球のポイントをもとに、互いの活動を評価し合う<br>**○○を振り返る**<br>● ねらいに沿った活動の振り返りを行い、次の活動へどのようにいかすのか考える | **○○するために○○を書く**<br>● 説明するために文章を書く　● 根号の中を簡単な数にする途中の式を書く<br>● 問題解決の流れで課題解決レポートを書く<br>● アメリカの学生に質問するための原稿を書く<br>● 相手にわかりやすく説明するための説明文を書く　● アメリカの地図から断面図を書く<br>**○○を表現する**<br>● 日本の範囲を表現する　● さまざまな地方区分を用いて表現する<br>● 方程式の考え方を利用して表現する　● 分母の有理化を段階的に表現する<br>**○○について話し合う**<br>● 題材について話し合う　● 感性的側面からの曲のイメージを話し合う<br>● 仮説を立てるために、個々の意見をもとに話し合う<br>● さまざまな地方区分が存在する理由について話し合う<br>● 題材について話し合う　● グループで中心的に尋ねたいことを話し合って決める<br>**○○を説明する**<br>● 緯度や経度の既習の知識を用いながら説明する<br>● 経済発展に欠かせないことを説明する　● 多民族国家の理由を説明する<br>● アメリカの特徴を説明する　● 平方根の意味に基づいて大小比較を説明する<br>● 有理数でないことを背理法で説明する　● ペアで問題を作り解き合い説明する<br>● 等しくならないことを根拠を明らかにして説明する　● ポイントを絞って説明する<br>**○○で問答する**<br>● 訪問した場所などについて英語で問答する<br>**○○を発表する**<br>● 理由を添えて話し合ったことを発表する　● 参考となる点を発表する<br>**○○を振り返る**<br>● 自分の言葉で感想を書き題材を振り返る<br>**○○をまとめる**<br>● 食品群と栄養素のかかわりをまとめる<br>**○○で出題し合う**<br>● グループ内で出題し合う<br>**○○に紹介する**<br>● 友人を紹介する文を書き、友人に紹介する | |

＊同校の資料を基に編集部で作成。下線は言語活動に関する部分

＊主な参考・調査文献は『学習指導要領解説』（文部科学省）、『「言語力」を育てる授業づくり・中学校』（図書文化社）、『各教科等における言語活動の充実』（教育開発研究所）

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第2回

# 言語活動で授業を捉えなおす

の10年度末には、どの教師も「**言語活動実践の記録**」を作成して活動の有効性を検討するまでに至った（P.12図4）。

「初めは『話し合う』『発表する』くらいしか案が出ませんでしたが、実際に活動をするとさまざまな方法があると分かりました。何よりも有意義だったのは、決して新しい取り組みばかりではないと分かったことです。理科で複数の現象を比較させたり、体育で試合前に作戦を立てたりといった活動は、従来、授業で行ってきたことです。自分たちの指導は間違っていなかったという安心や自信にもつながりました」（日吉先生）

研究授業の方法も工夫した。各教科の指導方針は多種多様であり、校内で公開授業や研究会を行う際、議論の焦点を絞りにくい。学校全体の取り組みにするためには、教科横断で協議を行うための工夫が必要だった。

「各教科の言語活動を横断的に検証した結果、どの教科でも大事な要素として『話し合うこと』『説明すること』の二つが挙げられることが分かりました。そこで、研究協議の際には、異なる教科でも共通の土台で議論できるよう、この二つのいずれかを授業に盛り込み、協議の柱にしました」（日吉先生）

## 言語活動を意識したらワークシートの作り方も変化

同校が行う言語活動を、6月に行われた社

図3　各教科の指導方針　国語の例

領域　話すこと・聞くこと

| 学年 | 今後の指導方針と導入する言語活動（学習活動） |
|---|---|
| 全学年 | ● 話された内容を、話し手の目的を意識して聞き取る<br>● 話し合いの場において、自分の意見をわかりやすく伝える<br>● 話し合いの目的に沿った自分の提案ができる |
| 1　年 | ● 話された内容について話し手や聞き手の目的に応じたメモの取り方を学習させる<br>● 日常生活の中での話題を題材にしたスピーチをする場を設定し、メモを作ることで構成を考えて話させる<br>● 話し合いの役割や方法を身につけさせる |
| 2　年 | ● インタビューで取材することを通して、目的に沿って質問を考え、テーマに関する情報を収集し、自分の考えを持たせる<br>● 自分の考えを述べるために、資料を使うことが有効であることを学習させ、効果的に使わせる<br>● 話し合いの形態（ディベート、パネルディスカッション等）を実践することで学習させる |
| 3　年 | ● 話し合いについて計画を立てて実践する学習活動を通して、自分の考えや意見を話したり意見を比較して聞いたりすることで、話し合いの目的に沿った提案をしたり、柱に沿った質問をしたりすることを目的とする |

＊同校の資料にある4領域のうち「話すこと・聞くこと」「書くこと」のみ抜粋。他の教科も、領域・学年ごとの指導方針を作成した

領域　書くこと

| 学年 | 今後の指導方針と導入する言語活動（学習活動） |
|---|---|
| 全学年 | ● わかりやすい説明をする能力を育成するための言語活動に重点化して単元を構想し実践する<br>● 目的に応じたメディア（言語を用いる媒体―新聞、パンフレット、リーフレット等）や文章の形態を意識させた言語活動を行う |
| 1　年 | ● 目的に応じてとったメモの情報を、多様な目的（相手を設定する、三つのキーワードで再構成する、自分の体験や考えを入れて再構成する、小学生にわかるように再構成する等）を設定し再現させる<br>● パンフレットやリーフレットの特徴を理解させ、目的を設定して教科書教材の内容をパンフレットやリーフレットに再構成させる<br>● 非連続テキスト（図表）からわかることを文章で説明させる |
| 2　年 | ● 調査報告文や記録報告文の執筆を行う言語活動を導入する。目的に応じた文章の型を知識としてもち、それを活用して執筆活動を行う。また、まとまった文章をもとに資料を作成し、それをもとにして発表会を行う。その際、同じ報告文をもとにして、目的を変えた資料を作成した発表も行わせる<br>● 資料を作成する条件として、調査や記録したデータを非連続テキストを使って表現させ、それを活用して報告文の執筆や発表を行わせる<br>● 新聞のメディアとしての特徴を理解させ、職場体験を通して知ったことや考えたことを新聞形式にまとめさせる |
| 3　年 | ● 説明文執筆のまとめ学習として、鑑賞文や批判文を執筆させる。観点（カテゴリー）を設定して説明することや比較しながら説明すること、評価する語彙に対する理解を深めることを目的とする |

**今日のことば**

三田川中学校では、教科の授業以外の場面における言語活動も大切にする。「今日のことば」は、教師や生徒の代表が書いた原稿用紙1枚程度のエッセイを毎朝放送で流し、印象に残った言葉や感想を書く活動である。生徒たちは放送を聞きながらメモを取り、それを基に自分なりの考えをまとめて文章を起こす。その作業を毎朝繰り返すことで、学習のベースになる聞く力や書く力、考える力を養うのがねらいだ。

原稿のテーマは教訓的な話や印象に残った出来事など。ちなみに6月某日のテーマは「ありがとうについて」。「生徒の学校評価においても、この取り組みを『誇りに思う』と回答する生徒は多いです。自分たちのためになっているという実感を、生徒たち自身が得ているからではないでしょうか」（古賀教頭）

会科の研究授業の例で見ていく。

この授業では「選挙制度」をテーマに話し合った。過去3回の国政選挙の結果（当選者名、投票数、政党名など）を見て、分かることと分からないことをグループで話し合い、結果をボードに書いて発表する。「復活当選とは何か」「参院選は同月に実施するが、衆院選は違う」など、次々と出てきた気付きや疑問を教師が集約し、選挙区制度、一票の格差問題など、選挙制度の理解につなげる。

「選挙制度について一方的に知識を与えるのではなく、話し合いで考えを深めた後に結論へ導くことによって、生徒の理解はより深まると思います」（古賀教頭）

話し合いは4人1組で行い、それぞれ司会、副司会、書記、発表者の役を担う。分担は座席によって自動的に割り当て、特定の生徒に難しい役回りが集中しないようにしている。

「どの生徒にも平等に機会を与え、皆が力を伸ばせるようにと、役割分担は機械的に決めるルールとしました。消極的な生徒もきちんと役割を果たすようになり、主体的な学習態度が育ちつつあります」（古賀教頭）

これまで授業で行っていた活動でも、言語活動であると意識することで、指導のアプローチや教材の作り方が変わるという。例えば、今回、使用した選挙制度について分かったことや疑問点を書くワークシートには「資料AとBを見比べて～であるということが分かる」という文例が示されていた。

「以前なら、ここまで丁寧に話型を示すことはなかったと思います。言語活動にこだわることで、生徒にどのような力を身に付けさせたいかが明確になり、より焦点を絞った指導が可能になります」（古賀教頭）

## 授業にメリハリをつけて授業時間の不足をカバー

言語活動は学力向上や主体性の育成といった成果が見込めるが、一方的な講義形式の授業に比べ時間がかかる点で敬遠されがちだ。

**図4　言語活動実践の記録　3年生数学 単元「三平方の定理」の例（部分抜粋）**

**◎単元での言語活動のつながり**

三平方の定理を理解・活用するために、定理の発見において「予想から一般化」に向かう「証明」の過程を大切にしていきたい。また、三平方の定理が有効に活用されている問題を解くことを通して、図形の性質をきちんと理解しまとめさせていきたい。

**◎単元の指導計画と言語活動**

| 学習の流れ | 時間 | 主な学習活動 | 単元の指導目標を達成するために取り入れる言語活動 |
|---|---|---|---|
| 三平方の定理 | 4 | ○三平方の定理を知る | ●「三平方の定理」を発見するために、ピタゴラスが発見したとされる状況を再現することで、疑似体験しながら、発見までの経緯を予想する |
| | | ○三平方の定理を証明する | ●いろいろな「三平方の定理」の証明を知り、証明の過程を理解しながら説明する |
| | | ○2辺の長さがわかっている直角三角形の残りの辺の長さを求める | ●「三平方の定理」を用いて辺の長さを求めるために、二次方程式の解法を振り返り、丁寧に計算をおこなう |
| | | ○三平方の定理の逆を知る | ●「三平方の定理の逆」の意味を理解するために、身近なところに利用されていることに気づく。また、いろいろな問題解決の糸口になることに気づく |
| 平面図形への利用 | 2 | ○正三角形の高さと面積を求める | ●正三角形のなかに直角三角形を見出すために、正三角形の性質を書き出す |
| | | ○三角定規の3辺の比を知る | ●「60°や45°を持つ直角三角形」の辺の長さに特別な比があることに気づくために、辺の長さに注目して三角形を比較する |
| | | ○座標平面上の2点間の距離を求める | ●関数の問題において、グラフの中に見える「直角三角形」と「三平方の定理」を関連付け、2点間の距離を求める |
| 空間図形への利用 | 3 | ○直方体の対角線の長さを求める | ●図の中に、直角三角形を見出し、手順を考え、求める過程を明確にするために途中の式・考えなどを表現する |
| | | ○正四角錐の高さと体積を求める | ●空間図形において、「三平方の定理」を用いて、長さ・面積・体積等が求められることを理解するために、立体の性質について意見を出し合いまとめる |
| 章末問題 | 2 | ○基本を活用しながら問題を解く | ●考え方を確認するために、途中の式等をしっかりと表現し、問題を解く |

実際の記録用紙には、上記の要素の他に、単元名と単元の指導目標が入る。これを用いて、取り入れた言語活動が単元の指導目標の達成に有効だったかを検討した

＊同校の資料を基に編集部で作成

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第2回

# 言語活動で授業を捉えなおす

同校でも、言語活動を意識し始めた当初は取り組みに不慣れなこともあり、授業時数が足りないと感じた教師が多かった。しかし、活動に慣れるにつれ、時間不足を補う工夫が出来るようになったと、日吉先生は話す。

「教科書をすべて読ませようと思ったら時間が足りませんが、話し合いの中で教科書を読ませたり、教え込みたい知識はプリントを併用したりと、授業にメリハリをつければ十分カバーできることを皆が実感しています」

教師は言語活動によって学力の定着度が高くなったと感じている。

「知識の習得には反復練習が効果的という考えもありますが、目的が不明確なまま反復練習をしても徒労と感じるだけです。100回反復して頭に叩き込むよりも、言語活動を通して体験的・帰納的に習得した知識の方が定着はより高いと感じています。遠回りのように見えて、実はこのような指導こそが学力向上の王道ではないでしょうか」（下川校長）

日吉先生も手ごたえを語る。

「言語活動を反映したテスト作りを心掛けていますが、教え込み中心の授業の時よりも定着率は高いという結果が出ています」

## 生徒の主体性を重視する言語活動は生徒指導にも有効

同校で教師が一丸となって研究を推進できるのはなぜだろうか。一つには、研究主任の日吉先生を中心に現場から意識を高めていったことが挙げられる。

「この先10年は学習指導要領が変わらない以上、言語活動に取り組むことは必須です。研究を推進する先生方は、そこを決定事項として強制するのではなく、『子どもたちの学力を伸ばしたいから今まで行っていた言語活動を意識してみよう』と呼び掛け、実行プロセスの一つひとつを先生方と納得し合いながら積み重ねてくれました」（下川校長）

「私たちの時は事例も少なく手探りの状態から始めたので、言語活動とは何かを理解するまでにだいぶ時間がかかりました。今は指導書や行政の資料などが充実していますが、文字だけでは分からないことがたくさんあります。我々教師は、実践してこそ効果や課題を実感できるのだと思います」（日吉先生）

同校がスムーズに言語活動を導入できたもう一つの理由は、かねてから授業で生活指導的な要素を取り入れていたことにもある。同校では生徒の自立を促すために、授業で「自己選択・自己決定をさせる」「自己存在感を生み出す」「共感的理解を育む」という「生徒指導の3要素」に即した場面を出来るだけ設けてきた。生徒指導や集団づくりに少なからぬ効果を上げてきたが、生徒が主体的に動けるよう一人ひとりに役割を与えたり発言の機会を増やしたりする手法は、言語活動と重なるところが多いという。先述した4人1組で行う話し合いの活動はその一例だ。

「言語活動が学びに向かう集団づくりにも一定の効果を上げるということが、今回の校内研究を通して確認できました」（古賀教頭）

今後は、授業力の向上に更に注力する考えだ。11年度中にすべての教師が公開授業を行い、スキルアップを図ると共に、校外の識者に協力してもらい、教科ごとにアドバイスを受けられるような外部の人脈を構築していく。また、現在は英語のみで実施している三田川小学校との連携事業の中に、言語活動を取り入れることも検討中だ。

### 下川校長が考える言語活動

本校の言語活動は、教科の目標を達成するための手立てとして始まりました。言語活動は日々の授業の延長線上にあるがゆえに、すぐに効果が表れないこともあります。しかし、我々がすべきことは、目先のテストの点数を2点、3点上げることではなく、将来、子どもたちが中学時代を振り返った時、「このような力を身に付けることが出来た」と言えるものを残していくことではないでしょうか。

そのために言語活動の充実は有効な指導であるという確信を持って、今後も先生方の指導力の向上、学校としての支援体制の整備を進めていきたいと思います。